

写真家 岡本尚文選書「本から知る沖縄」

竹中労『琉球共和国 汝、花を武器とせよ！』三一書房（1972年）

※2002年発行のちくま文庫版を展示しています。

ルポライターの竹中労が、1970年から72年にかけて雑誌を中心に書いた評論をまとめたもの。

1969年、初めて沖縄に渡った竹中は、嘉手苺林昌等多くの唄者に影響を受けながら、沖縄が抱える問題について多数の評論を書く。特に底辺の暮らしをしていた人々、尾類（沖縄の遊女）やヤクザなどから、沖縄の政治や未来について語った。

ジェンダーなどの概念がない時代だったため、かなり乱暴な論評も多いが、現在沖縄で議論になることが多い格差問題や貧困問題についてこの時代に言及していたことの意味は大きい。

『琉歌幻視行』と共に今こそ読み直されるべき書籍。

駒沢敏器／著『アメリカのパイを買って帰ろう』日本経済新聞社（2009年）

雑誌『SWITCH』『Coyote』などで活躍した駒沢敏器の著作。

戦争によってアメリカと出会ってしまった沖縄。折り合いをつけながらもアメリカと渡り合った沖縄の人びとについて、フィールドワークを駆使して書き上げた。内地出身者の外部の目を通して見えて来る沖縄（沖縄からすると当たり前過ぎて見えないものについて）について書かれている。

奇しくも、私が写真集『沖縄 01 外人住宅』の写真を撮影していた時期と重なる。

佐野真一／著『沖縄 だれにも書かれなかった戦後史』集英社（2008年）

取材方法が問題になることが多い佐野真一だが、それでも尚、この本によって語られた戦後沖縄のアーサーサイドは記録されるべきものだろう。ダークサイドというのではなく、これもまた沖縄が歩んできた戦後のひとつの道であり、その事実性を含めて何度も検証し書かれるべき歴史である。

比嘉康雄『神々の古層（全12巻）』ニライ社（1989年～1993年）

比嘉康雄『日本人の魂の原郷 沖縄久高島』集英社新書（2000年）

東京都写真美術館／編『琉球弧の写真』東京都歴史文化財団東京都写真美術館（2020年）

私が考える沖縄について、全てとは言わないが多くがこの3冊に現れている。

自己という近代的問題から出発し、結果自己を超えて沖縄と日本を照射した写真に圧倒される。祭祀を撮影した写真は数多くあるが、比嘉康雄の写真は祭祀を奇異なものや美しいものとして「表現」するのではなく、また単なる記録でもないというまさに写真の本質をあらわしている。

阿波根 昌鴻『人間の住んでいる島 沖縄・伊江島土地闘争の記録』

写真記録、自費出版（1982年）

戦後、米国施政化の沖縄で、伊江島おける射爆場建設に反対し、土地を収奪された農民とともに「乞食行進」を行いながら反対運動（1955-1966）の先頭に立った阿波根昌鴻による記録写真集。

6×6判サイズによる写真が、記録という概念を超えて言語に回収されない「写真の力」を突きつけて来るが、そこからまた、もういちど沖縄について考える始まりの写真集でもある。

真喜志 勉／[画]『Tom Max 1941-2015』真喜志奈美、自費出版（2016年）

沖縄の美術家・真喜志勉の残した作品や資料をスクラップすることで、真喜志の姿を浮かび上がらせようとしたメモリアルブック。

1941年に沖縄に生まれた真喜志勉は沖縄がアメリカと出会ってしまったことを引き受け、作品を制作した。その作品群には、アメリカ文化に対する憧れと基地のある島に対する抵抗といったアンビバレントな想いが形となってあらわれている。